

「アフガニスタンと日本の詩人による知性対話 言論の自由と女性の地位、社会の解放について」へ参加して

——付:ソマイア・ラミシュさんへの質問とその回答

岡和田晃

・ソマイアさん来日

2023年12月19日、来日していたアフガニスタンの亡命詩人ソマイア・ラミシュさんを囲む「アフガニスタンと日本の詩人による知性対話 言論の自由と女性の地位、社会の解放について」（以下、「知性対話」）が、横浜・寿のことぶき協働スペースで執り行われた。詩人で日本現代詩人会元理事長の佐川亜紀さん、歌人・詩人で中央大学文学部教授の大田美和さんがパネリストとして参加、私・岡和田がパネリストで、かつ全体の司会進行を担当した。

「知性対話」が開催されたのは、その二か月前の10月15日、同会場で『詩の檻はない』朗読会 ～横浜・寿からアフガニスタンへ、世界へ～」が催されたのがひとつの契機となっている。今回のイベントをオーガナイズしてくださった詩人の高細玄一さん、そして司会もつとめた詩人の遠藤ヒツジさん主宰の企画で、私はミニ講義を担当させていただいたのだが、関係者の臆目を除いても、確かな手応えがあったのだ。

ターリバーンによる詩の禁止へ抗する声は、日本でも周知の事実となりつつある。そうした動きが、広告代理店や政府の主導する「クールジャパン」ではなく、あるいは「詩壇」における内輪の馴れ合いとは別のところから立ち上がってきたのは特筆に値しよう。

仮に、これが動員を主としたものだったなら、たちまち「政治的」というレッテルを貼られ、ターリバーンに抗するどころか、むしろ親和的ですからある面々の姿勢と対立し、あるいは「サヨク」の絵空事として無力化されてしまったに違いない。

・詩と「革命」

風刺詩人の村田正夫は、こう述べている。「革命のために詩をかくべきではない。しかし詩は革命の導火線としてのエネルギーを持たねばならない」。（「組織／文学／政治／従属？」、1962年）。「革命」というといかめしいが、そもそもターリバーンによる政権奪取は、いわゆる「右からの革命」とも言える。

それに対抗する手段として、権力と結託した暴力機構による支配とは別種の共同体の

あり方を想起し、「明かしえぬ共同体」(ブランショ)を到来させる「革命」があるとしたら、それは詩を於いてほかにないのではないか——しかし、「革命」を自己目的化とするのでは、「主人持ちの文学」(小林秀雄)になってしまう。そうした姿勢とは根底から異なる、「革命」を胚胎させるだけのエネルギーこそが不可欠というのだ。『詩の檻はない』が備給するのは、そうした創発的エネルギーにほかならない——私がかような確信を得るに至ったのは、「知性対話」の経験を経たからである。

ソマイアさんの渡航にあたっては、野口壽一さんらの尽力があった。ビザの取得、日本での宿泊先の確保等には相応の苦労があったようだが、19日に会ったソマイアさんは、私たちにとても元気な顔を見せてくれた。

イベントの開始前には高細玄一さんの発案で、それまでソマイアさんが滞在されていた東京とはまた別の顔を持つ——日本の近代化の大きな要でもあった——横浜を案内した。桜木町駅に集合し、ランドマークタワー、エアキャビン、赤レンガ……。クリスマス・ムードに彩られた華やかな観光地をめぐりながら、ソマイアさんと私たちは様々な話題で気楽におしゃべりし、互いの距離を縮めていった。

・ハーフィズがつないだもの

ソマイアさんからはお土産として、出来たばかりの『詩の檻はない』フランス語版『Null Prison N' enfermera Ton Poeme』(セシル・ウムアニ編訳)と、ソマイアさんの詩集(「フラジャイル」で連載されている翻訳の底本)を託していただいた。

道中、様々な話をしたが、いちばん盛り上がったのはやはり文学の話題だったように思う。特に印象的だったのは、持参した『ハーフィズ詩集』日本語版(東洋文庫)を見て、ことのほかソマイアさんが嬉しそうな様子をしたことだ。いかにアフガニスタンにおいて詩が心のよりどころとされているかがうかがえる。この詩集は10月のイベントにおけるミニ講義でも紹介した『増補新版 ペルシア文芸思潮』(東京外国語大学出版会)の著者・黒柳恒男さんによる名訳で知られ、現在でもオンデマンド本として入手可能だ。

アフガニスタンにおいて詩がどれだけ身近なものかを知ってもらうため、急遽、イベントではソマイアさんによるハーフィズの朗読をしてもらうことにもなった。「知性対話」終了後には、同書をソマイアさんにプレゼントもしている。

また、「知性対話」では、話の本題に入るためのアイス・ブレイクも兼ね、冒頭で出たばかりの「フラジャイル」19号に掲載されたソマイア・ラミシュさんの詩「(書け、とあなたは言った)」(木暮純訳、岡和田晃校訂)を大田さんと私が、同じくアフガニスタンの女性詩人であるファルフンダ・シュウラさんの「(あの事件の怒りと血のせいで私は心が塞ぐ)」(中村菜穂訳)を佐川さんが朗読した。

柴田望さんのはからいで、会場に来た人にはもれなく「フラジャイル」19号が謹呈された。また、高細さんが新刊詩集『もぎとられた言葉』(コールサック社)、大田さんが歌集『とどまれ』(北冬舎)、佐川さんと岡和田が共著『詩界論叢 2023』(日本詩人クラ

ブ) を刊行したばかりの時期でもあり、新しい本が出たときに顕著な、あの特有の熱気を共有することができていたように思う。

・ソマイア・ラミシュさんへの質問とその回答

「知性対話」では、事前にソマイアさんへメールで質問事項を送り、それに対する回答をもらうことで、言語の壁によるディスコミュニケーションを避けるように腐心した。と実は佐川さんに質問の日本語文を、大田さんには英語文をご紹介いただき、ソマイアさんからの回答を私が噛み砕いて伝えることで、ありがちな読み上げだけの発表にとどまらず、臨機応変に話題を広げられるよう工夫したのである。

客席には、文芸評論家の神谷光信さん、コールサック社代表の鈴木比佐雄さん、パフォーマーの桜井真樹子さん、ジャーナリストの竹内幸史さん、詩人の青木由弥子さん、同じく詩人の野村喜和夫さん・水無川渉さん、作家の柳ヶ瀬舞さんら、錚々たる面々が居並び、またオンラインでは柴田望さん、詩人の二条千河さんや森耕さん、文芸評論家の東條慎生さんも参加し、コメントも活発になされた。ソマイアさんをアテンドし続けてきた野口壽一さんや、ことぶき協働スペース代表の徳永緑さんからもあたたかい感想を頂戴したが、それらを含めた当日の様子は「詩と思想」誌ほかに掲載されるというレポート記事に譲るとして、ここでは質問文をノーカットでご紹介したい。

質問作成および下訳は高細玄一さんが担い、私が加筆と上訳を行い、大田美和さんにご確認と意見をいただき、さらに私が推敲するという経緯で作成された。ソマイアさんからいただいた回答は私が翻訳を担当しており、この内容はイベント来場者にも配布されている。

●質問 1: はじめに、日本語での『詩の檻はない(NO JAIL CAN CONFINE YOUR POEM)』の出版に続いて、フランス語での『Null Prison N' enfermera Ton Poeme』の出版おめでとうございます。私たち(高細玄一、佐川亜紀、大田美和、岡和田晃)はこのことを快挙であると思います。率直な感想や手応えを教えてくださいませんか？

○回答 1: 紛れもなく、これは歴史的で偉大な達成です。個性豊かで素晴らしい作品…。包み隠さず申し上げれば、電子メールを開いて世界各国からの詩人たちの詩による応答を目にするたびに、涙があふれました。詩がもたらす共感と力は、そして検閲と抑圧に対する詩人たちの反応は、実際のところ、常に感動をもたらすのです。私一人が悪戦苦闘しているのではない、声は届いているのだという希望を与えてくれました。むしろ、これは私一人の声ではなく、アフガニスタンの人々の声が届いたということなのです。

私はこれを、歴史に残り多大な価値がある連帯だと信じています！

●質問 2: 以前あなたは、「アフガニスタンは世界で唯一、芸術が禁じられている国であり、そのような状況に直面して沈黙を貫くことは犯罪に等しい」と書きました。だからこそ、我々も繰り返し、あなたの言う「沈黙を破る」ことの意義を強調してきました。こうした状況に抗して声を上げ「沈黙を破る」こと、かようなフレーズの根底にある意味をお聞かせいただけますか？

○回答 2: マーティン・ルーサー・キングはこう言っています。

「結局のところ、我々は敵の言葉ではなく、友の沈黙をこそ憶えているものなのだ」と。キングの言葉は、沈黙がもたらす重圧について実際のところ語っているわけです。沈黙が抑圧を受け入れ、あるいは抑圧者への加担を意味するのだとしたら、許されることではありません！

だからこそ私は、世界の詩人たちに黙ったままでいないよう要請したのです……。芸術の責務の一つは、自由と真実にこそ奉仕するものだからです。芸術とは常に、抑圧や専制に反対の声を上げてきました……。なのになぜ、アフガニスタンにて現在進行形でなされている不正義、非人道的な状況を前に、世界は沈黙を続けなければならないのでしょうか？

そうなのです。アフガニスタンとは、世界で唯一、あらゆる種別の芸術が禁止されている国なのです。アフガニスタンでは、若い女性は学校へ行くことが許されません。着るものの色を選ぶこと、幸せの表明、笑顔や希望までもが禁止されてしまっているのです！

●質問 3: あなたが取り上げていた、ラスール・パルシ氏からの手紙についてお伺いします。ターリバーンに批判的なコメントをフェイスブックに投稿したため、3月1日にカーブルで逮捕され、拷問を受けた学者にして作家です。そのラスール・パルシ氏から娘への手紙をフランスで紹介したときの反響や感想はどのようなものだったのでしょうか。私たちは、インド独立前のネルーの獄中からの娘(のちのインディラ・ガンジー)への手紙を連想しました。特にパルシ氏が獄中で自筆にて記した、自由を意味する「Azadi アザディ」という言葉を観客に見せた際の反響につき、あなたはどう思いましたか？

○回答 3: 私がこの手紙を観衆に紹介したとき、あたかも、この真実がとても重苦しいもので、身体に重みを感じたかのように、頭を垂れた人たちがいたのを目撃しました。目に涙を浮かべる人もいました。

このことは、自由というものがいかに重要かを示しています！

人間は自由な存在として生まれますし、自由であるからこそ、人生には意味が与えられ、重要なものとなるわけです……。

ラスール・パルシは獄中にいますが、彼は私たちに自由について語りました。

ラスール・パルシだけではなく、ネーダ・パルヴァニ、ジュリア・パルシ、アザデー・

バハール、あるいはマニジェーのような女性たちも、ターリバーンによって囚われの身になっている、自由の預言者です。

ここに挙げた人々の闘争があつてこそ、未来は守られうるものです。けれども、ラスール・パルシは、こうした闘争だけを見ないでほしいとも言っています。世界は自由を階層化しています。西側の政治は、自由を定義するにあたり、二重基準を有しています……。そうした政治は、万人に対する平等を望んではおらず……。このことは不正義なのです。

ラスール・パルシが娘に宛てた手紙は明快ながら、深い意味があります。アフガニスタンは再び自由を取り戻さねばなりません！

●質問 4:アフガニスタンで詩が禁止され、さらに女子の教育が中学校以降の高校、大学、すべてから女性が排除され、移動の自由も制約されています。50 にも及ぶ女性の権利を制限する法令がターリバーンによって公布され、国会議員、エンジニア、研究者、軍隊、警察などの分野であまねく女性が排除されました。女性の就業からの排除は女性の失業率を劇的に高め、少女から夢を追う自由を奪いました。加えて増えゆく児童婚の問題が、少女や赤ん坊の健康を深刻に損なっています。こうした女性差別の構造——すなわち家父長制——と類似した状況が、日本でも他の国でも社会問題になっています。このような構造を変えるためにはどうすべきなのでしょう？

○回答 4: 私はアフガニスタンが、若い女性が学校へ行けない世界で唯一の国だと言わざるをえません。職に就く権利、教育の権利、政治・社会・文化に参画する権利が、社会一般において女性から奪われています。女性は一人で外出することができず、自分の着るものを選ぶ権利さえありません……。これはまさしく、ジェンダーのアパルトヘイトを意味します！ 女性が組織的に排除されているのです。女性を性奴隷とし、人間としてのアイデンティティを完全に奪い去るシステムです。

世界各国が、この状況に対して沈黙を続けるのなら、犯罪と差別と排除は常態化してしまいます！

かように、女性はどこでも被害者になりうるのです。

自由は階層化されるべきではありません。人権を政治や利益のために犠牲にしてもなりません。不幸なことに、今日の我々は、暴力や戦争、差別の常態化に直面しています。これらに対して沈黙を続けるのだとしたら、私たちは歴史によって裁かれることとなるでしょう。

●質問 5:世界経済フォーラムによって算出されたジェンダーギャップ指数において日本は125 位です。特に女性の政治参加が極めて低く、女性の実に 53%が非正規労働者です。医科大学の入学試験で一律に女性が差別されたり、職場では——「ガラスの天井」という比喩

に顕著ですが——出世の道が絶たれたりしています。新型コロナの下で10代から20代までの女性の自殺が急増しました。ジェンダー平等の法律である男女共同参画社会基本法が作られても、罰則がないために、企業の取り組みが遅れてジェンダー平等が進まず、経済効率性重視のために、妊娠や出産をし育児を担う可能性がある女性は男性に比べて役に立たないと男性も女性も思ってきたからです。このような現状に抗するため、詩人はどうすべきとお考えでしょうか？

○回答5：女性が女性であるという理由だけで差別されることは許されるものではありません。これは文明社会が克服しなければならない問題の一つですが……それでは、この明らかな差別と、どのように戦えばよいのでしょうか？ 教育システムを変えること、平等を原則とする法律を作ること、広告や啓発を行うことが、こうした状況を変えるためには効果があります。

詩人たちもまた、社会の一部であり、不正義や差別、暴力に無関心であってはなりません。というのも、芸術の役割の一つは、自由と真実に奉仕することだからです。詩は、黒人差別や抑圧に反対してきたという歴史もあります。

今日でさえ、詩は社会に対して責任を負います。芸術は物事を変えることができます。芸術は人々の願いを伝える声なのです。芸術には力があります……。ええ、あらゆる社会運動において、詩は法廷での正義をめぐる闘争とも密接に結びついてきました。

詩には、人々を抗議の現場へと誘う力があります。詩人は人々を勇気づけます。詩人たちはこの詩の力を啓発のために活用すべきなのです。

●質問6：あなたの「文学の使命のひとつは、闇に反旗を翻すことだ」という言葉にある通り、現在、アフガニスタンだけではなく、世界中で闇が広がり、生活のあらゆる場が将来の犯罪の可能性に変わっていくのを目の当たりにしています。まさしく、あなたが詩に書いた通りです。異議申し立て、アフガニスタンの詩人と世界中の詩人とのネットワークを構築するという活動は今後どう発展していくとお考えですか。また、あなたが起こした運動のアフガニスタンでのインパクトはどうでしょうか。

○回答6：私はグローバルな連帯について考えます！ あらゆる弾圧や抑圧に抗する、詩と言葉の連帯です！ 啓蒙のための詩人による連帯——力強く一致団結した声です！

私が世界中の詩人たちに呼びかけを行う前、アフガニスタンにおける詩と美術、すなわち芸術の禁止について知っている人はごく少数でした。あるいは知っていても沈黙を続けたのです。けれどもいまは、世界中のさまざまな国々で、この禁止令に抗す

る詩が書かれています。我々は日本とフランスで2種類の『詩の檻はない』と題した本を出版しました。

日本では、この件について1ダースを超える記事が書かれました。アフガニスタンの詩の禁止につき、世界各国のペンクラブが反対しています。これらはすべて、この運動の有効性を示す好例なのです。

そう、もう一度私は強調しますが、詩の使命の一つは啓蒙なのです。歴史を通して、詩はこうした使命のために存在感を発揮してきましたし、愛と抵抗の声を伝えてきました。それは民衆の声であり続けてきたのです……。

詩は世界を、よりよい形に塗り替えることができます。

アフガニスタンの詩人たちは、この連帯を高く評価しています。少なくとも私たちは、アフガニスタンの詩人たちが孤独ではないという感覚を与えているわけです。こうした支援は、詩が禁じられた詩人たちにとって励ましや希望を与えるものなのです。私は、こうした詩人たちによる詩を集めて出版しようと試みています。私たちは、芸術の禁止を許すべきではありません。この運動のさらなる広がりを願っていますし、私自身も不正義との戦いのために全力を尽くす所存です。

●質問 7: ターリバーン政権以前のアフガニスタンについて少々、お聞きしたいと思います。アフガニスタンでは、どのような詩人が、どのような場で、どのような形で、詩が作られたり朗読されたりしていたのかということを知りたいと思います。カカ・ムラードこと中村哲医師によれば、アフガニスタンにおいて詩は人々にとって親しみ深いもので、日頃から詩を詠んだり作ったりすることが行われてきたといいます。詩が生活の中に溶け込んでいる社会では、詩は優れて政治的な意味を持つことがあり、1961年にパレスチナでの占領地区において、結婚披露宴などで詠われる新郎新婦の祖先を讃える詩が民族意識を高揚させることに気づいたイスラエル政府が、詩人が公衆の面前で詩を朗読することを禁止する法律を制定したことが想起されます。

○回答 7: カカ・ムラードについて言及いただき、ありがとうございます。カカ・ムラードは日本とアフガニスタンをつなぐ友好の象徴です。私は彼の思い出を、心から大事に思っています。彼はまったく正しいからです。彼はアフガンの農民が、畑仕事をしながら詩を読んでいるのを見てきました。文字の読めないお祖母さんたちでさえ、眠っている子どもたちにさえ、小声で詩を読みきかせるのを見てきました。現在、詩とはまさしく日常会話になっているのです。どの家でも、ハーフィズやルーミーの詩集があり、冬の長い夜に一家の長が読んで聞かせるわけです……。

アフガニスタンのモスクにおいてさえ、『コーラン』の次に子どもが教えられるのが、ハーフィズやサアディの詩だと聞けば、驚かれるかもしれません。今日において詩は、人々の心にあり、日常の心に寄り添うものになっているのです……。ですのに、どうや

ったら特定の集団が、詩を書くのを禁じさせることができるのでしょうか？ どうして、一部の人は詩を恐れるのでしょうか？

私が言いたいことは、抑圧者、圧制者、人々を弾圧する集団は、常に詩の力を恐れているということです。彼らは、詩が人々の精神、魂へいかに影響を与えるのかを知っており、だからこそ詩に制限をかけるのです！

一方、ターリバーンに支配される前のアフガニスタンについてはどうだったのでしょうか……。私はターリバーン以前に詩人、政治家、社会運動の担い手として人格形成をしてきました。私はアフガニスタンの学校へ通いました。私はアフガニスタンで詩人となり、本を出版しました。私はTVに出演し、人々を代表してきました。何百万人もの若い女性が、アフガニスタンでは私が行使してきたようなすべての権利を有しているはずなのです。ターリバーンによる圧政が敷かれる前、女性たちは大臣、弁護士、人々の代表、政治家、芸術家、医者、ジャーナリスト、歌手、アスリートとして社会に存在する権利がありました。けれども、ターリバーンはこれらすべての権利を、人々から剥奪したのです。

●質問 8: 最後にお聞きします。アフガニスタンも日本もアジアです。あなたはデリー大学で学ばれてきましたが、私たちの仲間の一人(岡和田晃:注)も同大学で日本文学について講演をしたことがあります。日本ではタゴールの詩は著名ですが、他の詩人はあまり知られておらず、イランの詩人についてのわずかな研究書があり、アフガニスタンの詩人では、ついこの前、あなたのほかに、ファルフンダ・シュウラさんの作品を翻訳紹介したばかりです。あなたの詩には情報化社会における最先端のガジェットと、伝統的な宗教性への共感や反発が入り混じり、独自の作品世界を形作っているように読めます。詩作において意識していることがあればお知らせください。また日本やインド、アフガニスタンにおける詩あるいは文学、芸術についてどんなイメージを持っているのか、作家名や作品名もご存じのものがあればあげていただいて、話題にさせていただければと思います。

(注:Okawada, Akira "Two institutions that constitute contemporary Japanese literature and two writers who oppose the blockbuster" by the Indo-Japan Association for Literature and Culture held at the University of Delhi on September 16, 2017. 講演要旨:<https://prologuewave.club/archives/9879>)

○回答8:アフガニスタンとインドは、2世紀にわたって共通の言語を用いてきたため、強固な絆で結ばれています。どちらもペルシア語を使うため、アフガニスタンとインドでは、美術、文学、詩が相互に影響を与え入り混じってきました。ビデルやサイーブのような偉大なインドの詩人は、ペルシア語で詩を書きました。また、インド式のスタイルは、私たちの文学においても、最も重要な詩の様式の一つです。ファルシは、いまだに様々なインドの大学で教えられていますし、インドの詩人のなかにはペルシア語で詩

を詠む人もいます。それゆえに、私たちはインドの文学や詩について、明快なイメージを有しています。

ですが、アフガニスタンでは、日本の文学や詩も知られていると請け合っておきましょう。一例を出せば、俳句はアフガンの詩人たちにはよく知られており、アフガニスタンには俳句のスタイルで書く詩人たちすらいます。このスタイルは、多くの同時代の現代詩人たちに歓迎されているのです。

日本の小説はアフガニスタンにもファンがいますよ。

私自身は村上春樹の小説が大好きで、彼の『海辺のカフカ』についての書評を、数年前にアフガニスタンの新聞に書いたことすらあります。

私は村上春樹のほか、夏目漱石、安部公房、松尾芭蕉について知っています。これらの作家の仕事はペルシア語に翻訳され、詩人や小説家たちに知られてきました。

私はまた、アフガニスタンでは、詩はさまざまな様式で書かれているとも言っておかねばなりません。古典的な様式、モダニズム、そしてポストモダニズムといった具合です。それぞれ、言語学的、形式的、内容的な相違があります。

ロマン主義の詩、抵抗詩、社会詩……ここで言う抵抗とは、宗教や社会に対する抵抗のことです。詩とは民衆の言葉なのです。詩は民衆の夢と民衆の抵抗を描くものなのです。

詩は美を創造し、闇を照らして新たな意識を生み出すもの。つまりランプに灯される光でもあるわけです！

・おわりに

ご覧いただければわかるが、ソマイアさんの回答は、詩の社会性についての強い信頼に裏打ちされている。それだけではなく、詩はアフガニスタンの現状を広く知らせ、人々の蒙を啓き、0を1にする創発的な機能をもあわせ持つことが含意されており、それはシニシズムが蔓延した日本社会が失って久しい姿勢と言えるだろう。

日本社会の抑圧をターリバーンのそれと隔絶させるような言説が世間にはまみ見られるが、女性差別の構造は何も変わらない。イベント開始前のソマイアさんとの談話では、「ターリバーンは女性を control (支配) どころか、imprisonment (投獄) している」という悲壮な状況が説明された。この言葉の重みを噛みしめていく必要がある。

なお、質問8で何人かの日本人作家が言及されているが、事前の打ち合わせにおいて、安部公房に絡め、ガルシア＝マルケスにも影響を受けたという言葉が発せられたことは、特筆しておく価値があるかもしれない。ソマイアさんが新聞に寄せた、ペルシア語での『海辺のカフカ』評は、最近、ご本人から現物を案内いただいたので、そちらも何らかの形でご紹介できたらと考えているところだ。